

ケンジとミチコの音声談義

中村雅之

1. 新学期

大学ももうすぐ新学期が始まるので、ミチコは新しい時間割を受け取りに学務係に立ち寄り、それから自販機のコーヒーを片手に生協食堂の窓際に陣取った。昼食にはまだ早い、まずは春の景色を眺めて一服しつつ、今年はどの外国語に手を出そうか思案しようというわけだ。ミチコは時間割をめくって、ロシア語と中国語に赤のマーカーを引き、スペイン語に青のマーカーを引いた。

「赤と青はどう違うんだい？」と声をかけてきたのはケンジだ。ミチコとケンジは二人とも文字と言語が大好きで、競うようにいろいろな言語に挑戦している。ヨシタケ先生のドイツ語の授業では二人でクラスのレベルを一挙に引き上げてしまった。

「赤は中級のクラス、青は初級よ」とミチコが答えると、ケンジは「君の性格ならスペイン語よりはイタリア語の方がいいんじゃないかな」という。何故かと問うと、イタリア語の方が発音が明瞭で、スペイン語は予想以上に自然な発音に苦労するというのだ。

「そうなの？ スペイン語も十分に明瞭な気がするけど」

「いや、実はかなり難しい。単に通じるだけならカタカナ発音でもいいけど、自然さを求めようとすると、結構ストレスが溜まるんだ。問題は二つあって、一つは地域的多样性。もう一つは子音の弱化だ。スペイン本国と中南米諸国ではそれぞれに癖が違うので、どれを手本にするかという問題がまずある。そしてそれ以上に、母音間の有声子音が弱化して摩擦音に近づくのがやっかいだ。母音間の[d]や[g]は本当に難しい。ノーマルスピードで話す時にはこの傾向は割と顕著に出てくるので、スペイン語の発音はイタリア語に比べると全体的に暗い印象を受ける」

「そうなんだ。それじゃイタリア語にしようかしら」

「それがいいと思うよ。明瞭さを求める君の性格とも合ってるし」

2. 弱化

「そう言えば、ロシア語の音声について、前から疑問に思っていることがあるの」

「何だい？」

「<私は知っている>というロシア語< . > なんだけど、日本人講師の先生はみんな<ヤー スナーユ>って発音するの。でもロシア人の発音はみな最

後の母音が違って、<ヤー　ズナーヨ>なのよ。これってどうして？　最初はロシア語の[u]の円唇性が非常に強くて、日本語の「ウ」よりは「オ」に近いのかと思ったのだけど、いくら注意深く聞いても[zná:jo]としか聞こえないの」

「君の耳は正しいよ。ロシア人の通常の発音は[ja　zná:jo]だね」

「でも文字は{　}[ju]なのに、どういうこと？」

「弱化しているんだ。ロシア語の母音の弱化については文字{o}の場合については必ず説明するけど、その他はほとんど説明しないし、日本人の先生の場合だと、そもそも気づいていないこともある。文字{o}は、そこにアクセントがある場合には[o]の発音、アクセントを持つ音節の直前では[a]の発音、その他の位置では[　]というのがおおよそのルールだ。つまり、音声的にはアクセントのない[o]が隙間になっているんだ。そこで狭い円唇母音の[u]はアクセントのない位置、とりわけ最終音節ではしばしば弱化して[o]になる。つまり、同じ[o]でも、アクセントの有無によって補い合う関係にある。だから[ja　zná:jo]という発音を聞いても、それが<　　>であることに全く誤解を生じないのさ。有坂秀世の音韻論に従うならば、最終音節の[jo]は音韻観念としては[ju]なんだ。」

「そうか、ロシア人は頭の中では[ja　zná:ju]と発音しているつもりなのね。」

「そして、聞く側もそう発音している筈だと思っているから、日本人講師の先生がたもこの発音をほとんど問題にしないわけだ」

3. モンゴル語漢字音訳

「何だ、君たち食事はしないのかい？」とカレーライスの載ったトレーを片手に近づいて来たのはヨシタケ先生だ。なにやらキリル文字の書名が記された本を小脇に抱えている。その本がテーブルの上に置かれると、<　　-　　-　　>という書名が見えた。

「それって、パラディウス本の『元朝秘史』ですか？」とケンジが尋ねる。

「おお、よく知ってるね。そう、半世紀ほど前に出版された15巻本の『元朝秘史』だ。普通には四部叢刊の12巻本がよく利用されているけど、かなり誤記が多いので、本格的な研究には絶えず15巻本を参照する必要がある」

ケンジとミチコは目配せをして(本格的な研究って、あなたの本業はドイツ語でしょうが)という言葉飲み込んだ。

「ところで、『元朝秘史』が13世紀のモンゴル語を14世紀末の中国語音を利用して漢字で記された本だということは知っていると思うけど、最近面白い例を見つけてね。

中国語で〈多半〉という逐語訳を与えられた語がある箇所では{斡樂勤}と記され、別の箇所では{斡籠勤}と記されている。さらには甲種本『華夷訳語』を見ると、この語は〈多的毎〉という逐語訳が付いて{斡郎勤}というまた別の音訳法で記されているんだ。一体この語はどんなモンゴル語音を表していると思う？ ちなみに、リゲティ方式による栗林均氏の索引では{斡樂勤}が〈olonkin〉、{斡籠勤}が〈olungkin〉と転写されていて、一方、『華夷訳語』を研究したMostaertは{斡郎勤}を〈olangkin〉と転写している。でもみんな同じ語なんだよ」

ケンジは三種の漢字音訳{斡樂勤}{斡籠勤}{斡郎勤}を眺めてから、「やっぱり、モンゴル語としては〈olongkin〉と転写されるべき語なのではないでしょうか」と言った。

「そうだね、僕もそう思うよ。表そうとしている音声はおそらく[l kin]だろう。ところが第二音節の[l]を上手く表す漢字がなかった。そこで表記に揺れが生じ、{斡籠勤}〈olungkin〉あるいは{斡郎勤}〈olangkin〉となった。しかし双方ともモンゴル語としては〈olongkin〉と転写してあげるべきなのだろうね。」

「かつて、服部四郎が〈mongolかmangolか〉で論じた問題と同じですね。ところで、残りの{斡樂勤}〈olonkin〉は？」

「これは語源意識に基づいた音訳だな。〈多〉という逐語訳が記された、つまり〈多い〉という意味の形容詞に{斡樂}〈olon〉という語がある。それに接辞の〈kin〉を付けて〈olongkin〉という語ができた。逐語訳の〈多半〉〈多的毎〉から察するに、大半、大部分というような意味だろう。そこで、そのような語源意識を持っているものが{斡樂勤}〈olonkin〉という音訳をしたわけだ。しかし、これでは第二音節末子音が不正確なことになる。結局、〈olongkin〉をぴたりと表す音訳ができず、近似的な三種の表記が生まれたのだ」

猛烈な勢いで説明しながらも、ヨシタケ先生は器用にカレーを平らげた。春の景色とカレーの匂いの中で、ケンジとミチコは(今年はモンゴル語をすこし“本格的に”やってみようか)と思い始めていた。